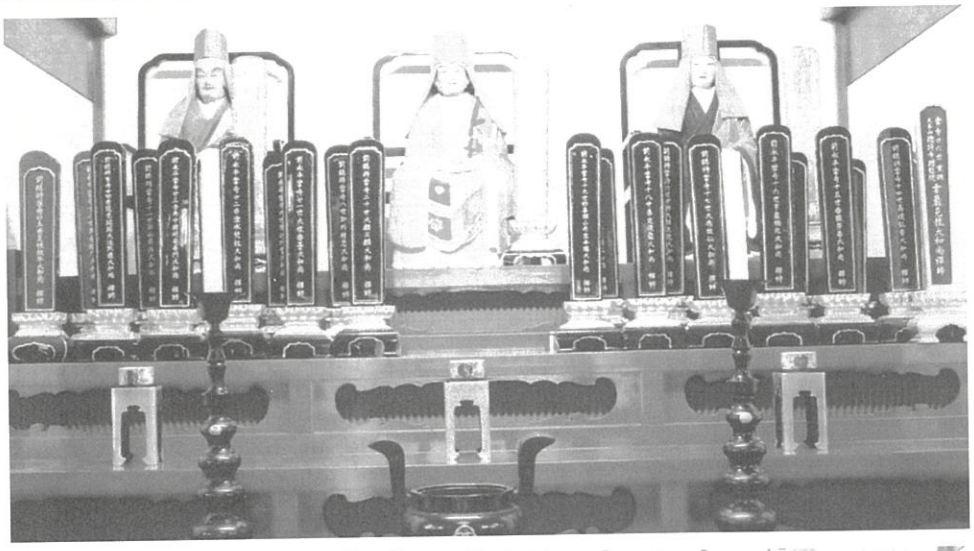
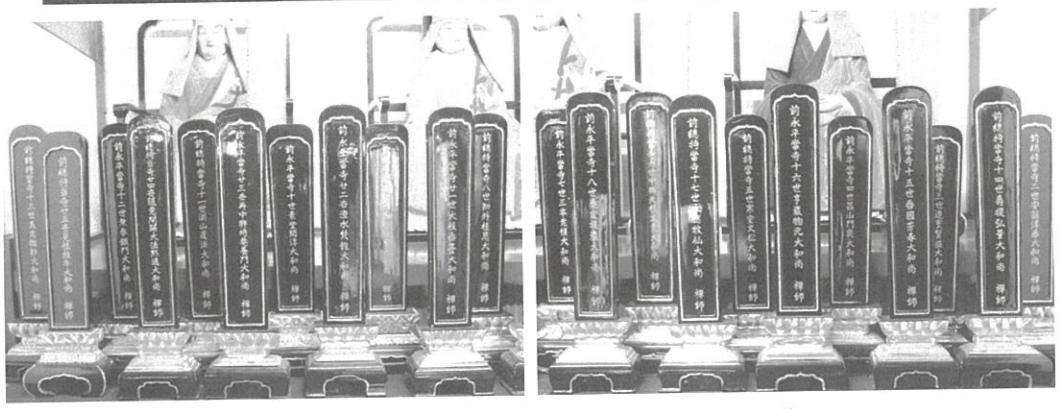
蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811
◆スタッフ◆
小林国二・小林善秋・高橋潔
室賀清輝・高橋利春・加瀬由紀子
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社





安善寺御開山様と道元禅師様、螢山禅師様と歴代住職のお位牌

ご家族の皆さまでご覧ください

『躾』は大人の後ろ姿から

翠巖 龍弘

昨年十月一日に愛犬サクラが亡くなり、副住職もほとんどを大本山總持寺での生活のため、普段は住職夫婦、副住職の妻と孫の真人、愛犬ノン、愛猫ボブという四人と二匹という家族構成となり、少し寂しくなりました。

しかし、今年は四月中旬から鶯が毎日美しい声で鳴き、爽やかな日々と元気を与えてもらう日々でした。そんな中、愛犬ノンが五月七日に牡犬を、八日に牝犬を産み、ひと月近くが過ぎると二匹でちょろちょろ歩くようになり、泣き声も大きく一遍に賑やかになりました。

母犬は甘えん坊で、母親になれるのかと心配しておりましたが、よくしたもので絶えず子犬から離れず面倒をみており、少し育ち子犬が悪いこと（人間から見てそう感じること）をすると、かるく子犬を噛み、教えているように見えます。家族以外の人や猫が近づくと今まで聞いたことのないような迫力で吠える等々、子供を守り、色々なことを教えているようで、しっかりと親犬を務めております。

最近は子犬も活発になり、もう大丈夫と思うのか、猫（ボブ）に対しても知らん顔。そんな様子を見ていると、それぞれの生命が伝承され、永年に渡って生き方（それぞれの文化）などが伝えられていくものと感慨無量になります。

私の初孫、真人も順調に育ち、八月で二歳になります。よちよち歩きの頃より、私が本堂へ行くと後ろからついて来て、木魚や鐘をたたき「ニャン、ニャ、ニャー」とお経を読む真似をしております。

私は本堂に入る時、後ろ向きになってスリッパを脱ぎ、そのまま入って体を回転させて歩くのですが、孫はスリッパを履いていないにもかかわらず、私がいない時でも本堂に入る時わざわざ後ろ向きになって入ると、家族が笑いながら話をしているのを聞き、「ハッ」としました。

身を美しいと書いて「躾」となります。辞典には礼儀作法を身につけさせること。また、身についた礼儀作法と書かれております。「美しい」は感じがいい。きれいだ。また（その場のようすやおこない・性質などが）好ましく感じがいい。うるわしい、と載っています。

子供は大人の後ろ姿を見て育つといいます。子供の躾は大人の後ろ姿で大きく影響されるのではないでしょうか。大人は何事においても良い後ろ姿を子供に見せて生活し、素晴らしい躾を自然に身につけさせたいものです。

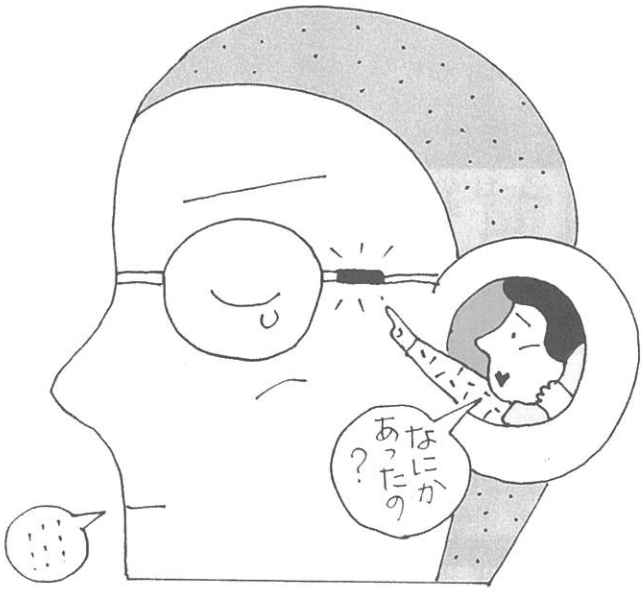
【日々精進(十七)】
様々な人の支えがあるから…

近藤 真弘

早いもので私が二度目の本山上山から一年が経ちました。四年間と比較的、間を置かずに二度目の上山だったので御本山の生活自体にはすぐ慣れましたが、改めて御本山で一年間通して生活をすることで、御本山總持寺の行事の綿密さやそこで日々修行生活を送っている修行僧の真摯な修行に対する取り組みの姿勢には改めて学ばせて頂くと共に、同じ曹洞宗の宗侶として何か安心感を覚えたのも事実です。

今年新たに上山した修行僧も三ヶ月の禁足期間を終え、ようやく修行生活に慣れてきた様子も伺えます。

先日ある一年目の修行僧と話をしていると、その修行僧は禁足が開けて電話を使用しても良い許可がおり、早速実家のお寺に電話をしたそうです。本人も久しぶりの電話で両親と話すのをとても楽しみにしていました。いざ、電話口で母親が出ると本人以上に喜んでいる母親の様子が伝わり、短い時間だったけどいろいろな事を聞かれ、すごく自分の事を心配していたことが嬉しかったと話していました。



そんな話をしていると私も十一年前そんなだったなぁと、その当時の事を思い出しました。私がその当時禁足が開けて初めて電話をした時は今と同じお寺の中にある公衆電話でした。公衆電話は二台しか無かったので禁足の開けた私と同じ修行僧が電話の前に列を作っていました。私の順番が来て母親と久しぶりに話をした時、まず聞かれたのが、「あなた眼鏡が壊れていたみたいだけど何かあったの？」という心配の問いかけでした。実は禁足中に自分の不注意で眼鏡のフレームを出入り口の扉でぶつけてフレームが壊れ、テープで補修していたところをたまたま本山に来ていた近くのお寺の奥様に見られ、母親には眼鏡が壊れていたということだけが伝わっていたのです。理由を知らない母親はまさか誰かに叩かれたりして壊れたんじゃないかと随分心配をしていたようで、その電話で理由を話すと、安心していた様子を今でも覚えています。

今の時代はたとえ海外にいても簡単に連絡が取れ、電話や手紙でも全く連絡の取れないということはなかなかありません。修行している本人も不安や辛い思いもありますが、待っている両親の気持ちは本人のそれ以上なのかもしれません。

上山して二ヶ月程で新しい修行僧は葉書を一枚もらい師匠に手紙を出す許可が貰えます。その時は小さな葉書に少しでも多くのことを書こうと、虫メガネでもないと読めないくらい小さな字で表半分と裏にびっしり近況報告や送ってもらいたい物などを書きました。

修行が終わって五年前に安善寺に帰ったときにその葉書を大切にアルバムに挟み保存されているのを見た時は、嬉しさを感じました。

修行というのは決して一人でできるものではないと思います。多くの修行僧と切磋琢磨するのと共に、そこに一緒にいなくても様々な人の支えがあって成り立ちます。

今年の新しい修行僧も自分の為の修行に多く人の協力がある事を肝に銘じて精進して頂けたらと思います。

世界に誇る、市民みんなの『アオーレ長岡』

長岡市長　森　民夫

先日、アオーレ長岡で大変嬉しくなる出来事がありました。

中之島保育園の園児と保護者約百三十人が、屋根付き広場の「ナカドマ」や「オープンテラス」で、みんな仲良く昼食やお遊戯を楽しまれていたからです。

その日は雨模様だったため、急遽、親子遠足の行き先を越後丘陵公園からアオーレに変更したとのことですが、まさかアオーレが遠足に使われるとは、正直、思ってもいませんでした。

このように最近では、子どもたちが大勢見学に来るようになりました。元気いっぱいの子どもたちの姿をガラス張りの市長室から目にすると、毎日の忙しい公務を一瞬忘れ、「ほっと一息」心が和みます。

また、上小国小学校の生徒が東日本大震災への義援金寄付と小国地域のPRのために、学校田で栽培したお米を販売するといった心温まる出来事もありました。

お年寄り、学生たちが食事やお茶を思い思いに楽しみ、結婚式や発表会、地域の物産販売など市民手作りのイベントが日々行なわれている風景を前にすると、アオーレが市民の〝憩いの場〟として確実に定着し始めていることを強く実感します。

一方、市民による活用とは別に、首都圏で開催されるような大きなイベントも行なわれています。

「アオーレ音楽祭」では、長岡ゆかりのアーティスト、加山雄三さん、沢田知可子さん、平原綾香さん、小椋佳さんが、三千六百人の観客を魅了しました。

また、NHKドラマ「ゲゲゲの女房」の主題歌を歌い、若者に人気の「いきものがかり」が、〝こけらおとし〟コンサートを開催。全国ツアーの初日ともあって、全国から大勢のファンが詰め掛けました。

アオーレは、ナカドマを中心に、アリーナ、市民交流スペース、市役所・議会などの機能が混然一体に溶け合う、全く新しい考えの公共施設です。

五つの障害者施設が協力して運営する「福祉のカフェりらん」や、コンビニなども併設しています。

そして、長岡城、公会堂、厚生会館と、いつの時代も市民が集まり、市民の誇りの中心であり続けた地に建設されました。

アオーレ。その心は長岡弁の「会おーれ」。市民みんなが集まり、自由な発想で楽しみながら使うことで、日々進化していきます。

市民の湧き上がるエネルギーで、新しい長岡の顔として、そして市民の心のよりどころとして、大きく成長することを確信しています。

長岡市長　森民夫の経歴

昭和二十四年長岡市生まれ。東大工学部卒業後、コンサルタント会社を経て、旧建設省入省。平成十一年十一月、長岡市長に初当選し、現在四期目。二十一年六月からは、全国市長会会長も務める。

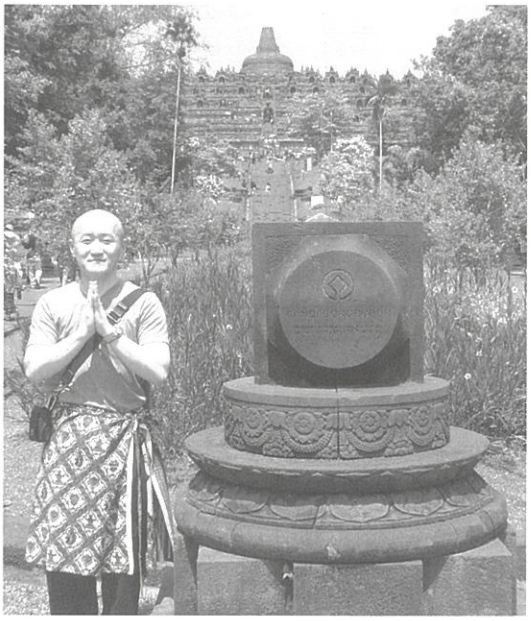
『ボロブドゥール・バリ島の旅』に参加して
いつまでも神秘的象徴であり続けて欲しい仏教遺跡

森田 敬史

長岡西病院ビハーラ病棟で常勤ビハーラ僧(常駐している僧侶)として、5年と2ヶ月の間勤務させていただきました森田と申します。そのおかげで、ボランティア僧として病棟にお越し頂く安善寺方丈様とご縁をいただき、檀信徒ではない人間であるにもかかわらず2年前の「インド仏跡巡拝の旅」に同行させて頂きました。

この度、隔年で企画されている参拝旅行の行き先がインドネシアのボロブドゥール仏教遺跡に確定したという一報を受け、すかさず参加の意向を固め、半ば強引に身重の嫁を説得しまして、めでたく(?)ご一緒することができました。

さて、そのツアーの中で最も私が興味をもっておりましたのが、やはりボロブドゥール遺跡でありました。全島併せてイスラム教徒とキリスト教徒で、人口の9割以上の信者数を有する国にあって、何故あんなに広大な仏教遺跡が現存しているのか、その一端を肌で感じることが出来ればと思い、この度のツアーに申し込んだのは言うまでもございません。



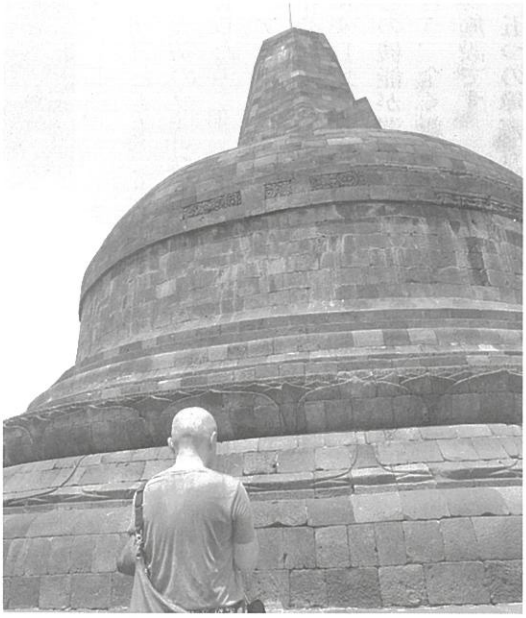
ちなみに、誰が何の為に建立されたかが未だに解明されない謎が多いボロブドゥール遺跡は、世界最大級の仏教遺跡であり、ユネスコの世界遺産に登録されております。総延長5kmにおよぶ方形壇の回廊には、仏教説話にもとづいた1460面におよぶ浮彫彫刻レリーフが時計回りにつづいており、登場人物は1万人におよぶとされております。

その下に位置する基壇が欲界、方形壇は色界、円壇は無色界として表現されており、人が下から上へ登っていくにつれ、欲望にあふれ、罪悪に満ちた世界から、禅定に達した世界へと移っていくもの、すなわち、悟りをめざす菩薩の修行を表現しているとみなすことができるとされております。

浮彫彫刻レリーフをその目で確認し、そして順々にガイドさんに説明いただきながら描かれているストーリーを辿ると、その雄大さに何とも言えない感覚を覚えまして、何度も感嘆の声を上げっぱなしでおりました。

その回廊をどんどんと上がっていきますと、ストゥーパ(仏塔)が現れ、さらにその中心部に「完全なる無の境地」を表すとされるメインストゥーパ(中心仏塔)がどっしりと、まさに頂きを象徴するかのごとく堂々たる姿を現していました。せっかくだからと、そこで般若心経を一巻お唱えさせていただきましたが、当人はまだまだ無の境地には程遠いと思われます(写真)。

方丈様が以前いらっしゃった時よりも様々な面で整備が進み、本当に訪れやすくなったと仰っておられましたが、時代が進むにつれて、ますますその時代の英知や科学技術が結集され、人々の生活を快適にしていくでしょう。



様々な技術発展が進んでいる社会と言われるその中にあって、この仏教遺跡には未だ謎が多いというのは、まさに神秘的象徴であり、だからこそその場所に訪れることによって何かを感じることができるのではないでしょうか。出来ればその魅力を失わないためにも、これからも解明されない側面があって良いのかもしれません。前回に引き続き、ありがとうございました。

合掌。

飯泉清一さん、またお会いできるときまで!

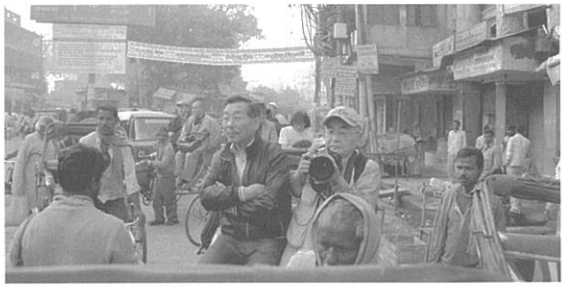
浅野ゆうこ

なにげない朝に、ふと新聞でみつけた飯泉清一さん(BS観光社長)の訃報。あんなにお元気だったのに?! 私は動揺して、それから涙がとまりませんでした。

飯泉さんとのご縁は二年前のインド旅行のとき。はじめてのインド旅行はオロオロ、ドキドキの連続だったけれど、飯泉さんはベテランでなんでも知っているし、どんなアクシデントも切り抜けてかっこよかった。そして誰に対してもやさしく、いつも明るい笑顔の方でした。

飯泉さんとご一緒したのは、そのインド旅行だけだったけれど、亡くなられたと知って胸に去来する感情は、悲しいとか寂しいというわかりやすいだけものだけではなく、とびきりエネルギッシュな人が、その人生を終え旅立ったことへの感動のような、なにか胸にずんとくるものがありました。

身に響くようなこの感情を、このところ幾度も味わっています。授かった生を終え旅立つというのはごくあたりまえのことだけれど、私が歳を重ねて命に対する畏敬の念が強くなったせいか、死が人ごとではなくなってきたせいか、ご逝去にふれるたびにその人なりの人生を歩まれたことや、精いっぱい生ききったことに心を揺さぶられ、身の奥深くから言葉にはできない感動とともに、静かな涙がこぼれます。



飯泉さんは、ご自分の命がそう長くはないとわかった日でさえ、そんなそぶりはまったく見せず、いつもとかわらぬ笑顔でインドネシア旅行の説明をして、借りん糖まんじゅうを「季節限定ですよ!」とふるまってくださいました。その強靭な精神力と仕事のプロに徹する姿に胸を打たれます。

もう一緒に旅はできなくなったけれど、きっとどこかで見守ってくださるでしょう。「おっ、浅野さん、こっちもいい所ですよ。みなさんがおいでになったら案内しますよ。そちらのことはね、息子にまかせてあります。なんの心配もしていませんよ!」と、にっこり笑っている気がします。

その人の絵顔や温かなまなざしをいつだって思い出せる。そして声が聞こえる。それは生きている人にとって支えとなり、導きとなります。そう「先に逝った人は残された人のご導師となる」と、先日ご住職に教えていただいたばかり。

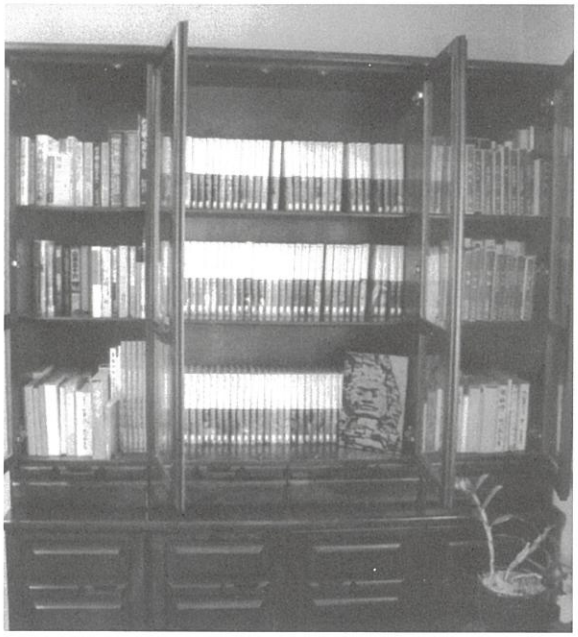
飯泉さん、そちらへ行ったら、あの世ツアーに参加します! それまで七転八倒しながら精いっぱいこちらで生きてみます。どうぞ安善寺様のご縁で知り合った方々を見守ってくださいね。では、またお逢いできるときまで!

英気は無かるべからず。但だ圭角を露わすは、不可と為す。『言志晩録』

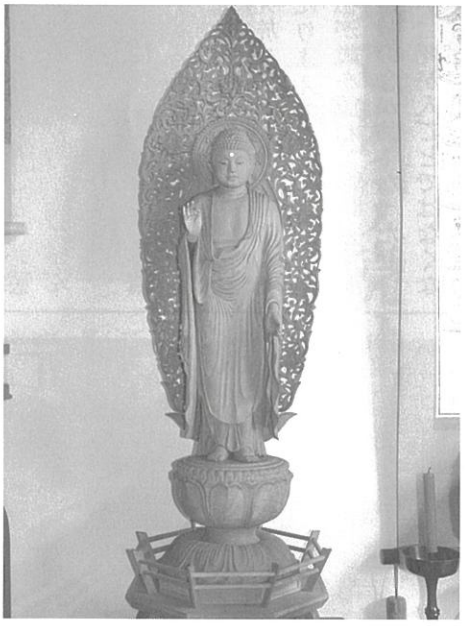
『良寛文庫』など、寄贈された本をご利用ださい

平成十九年の一月号(季刊第三十六号)で紹介しましたが、藤沢市在住の佐藤圭司様より、子供向けから良寛詩集・相馬御風・貞心尼・良寛全集等々、良寛さま関係三百冊以上の贈書を受け、『良寛文庫』として本箱を本堂に設置させていただき、多くの人から利用していただいています。

今年の二月に、またも沢山の「良寛さま」関係の本、他に「山本五十六」・「河井継之助」関係の本を寄贈していただきました。写真のように『良寛文庫』は本堂、山本五十六並びに河井継之助関係の本は、ひろさちや原作、荘司としお漫画の「仏教コミックス全一〇八巻」と同じ本箱に、本堂となりの部屋に設置いたしました。大勢の方々から遠慮なくご利用していただきたいと思います。



安善寺本堂、室中の間に安置の『観音様』もお参りください



今年春、長岡市下山にお住まいの佐藤典司様より、写真にあるように立派な観音菩薩様が寄贈されました。佐藤様は今年四月に亡くなられた、安善寺の旅行で毎回お世話になったビーエス観光所長の飯泉清一様の義兄です。

長年趣味で仏像彫刻をされ、沢山の仏さま方を彫られておりますが、この観音様は昭和五十四年四月に完成した、檜を彫刻されたものです。とても素人とは思えない素晴らしい聖観音菩薩像です。

菩薩さま方は、菩提(さとり)を求めると同時に我が身を捨てて一切衆生の抜苦与楽せんと誓願されております。また、常に六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天)生死の巷を往来して衆生を救済するといわれる観音菩薩は、大乗仏教における仏の慈悲の象徴として、菩薩の中でも地蔵菩薩とともに崇拝、慕われております。

檀信徒の皆様も、安善寺にお参りの時は是非、本堂室中の間に安置されております聖観音様もお参りください。

お別れ

(平成廿四年三月～六月末まで)

大平十二郎様　三月十四日寂
長岡市呉服町

●

片野平八郎様　四月三日寂
長岡市豊詰町

●

笠井　義一様　四月十二日寂
長岡市山田町

●

寒川　誠一様　四月二十日寂
東京都中野区

●

田中　昭男様　四月廿三日寂
長岡市青葉台

●

飯泉　清一様　四月廿三日寂
長岡市大山

●

鷹藤　一友様　四月廿七日寂
長岡市坂之上町

●

津端　謙一様　五月九日寂
長岡市新町

●

山崎　イツ様　五月十日寂
長岡市城岡

●

江口　勇様　五月十三日寂
長岡市小曽根

●

矢澤ナオミ様　五月廿一日寂
長岡市美園

●

笠井　浩様　五月廿五日寂
見附市今町

●

石丸　ツヤ様　五月廿六日寂
長岡市川崎

●

菊田　春虎様　六月三日寂
長岡市蔵王

●

目黒　英美様　六月四日寂
長岡市福住

●

名兒耶　清様　六月六日寂
東京都台東区

●

今井　久之様　六月十日寂
東京都足立区

●

臼井　肇様　六月十九日寂
長岡市中貫

●

玉垣シズ子様　六月廿一日寂
長岡市平

●

山崎正英様　六月三十日寂
長岡市城岡

人は皆、安否を問うことを知れども、心の安否を問うことを知らず。　『言志後録』

旬歌 愁灯

[二十二話]

「ブンガワン・ソロ」

加瀬由紀子

インドネシアへの旅に真っ先に手を挙げたのは、ゆったりと流れるソロ川を歌った「ブンガワン・ソロ」のメロディと、「バリ・ガムラン」のゴングやサロン（木琴）の神秘的なリズムを思い浮かべたからだ。世界遺産に登録されている仏蹟の訪問にも興味があった。

かくして二月、残雪の長岡から「安善寺・ボロブドゥール仏蹟視察団」ご一行十七名様は、成田発ガルーダ航空機に搭乗、ジャカルタに向かって飛び立った。

更にジョクジャカルタへと国内線にトランジットする。さすがに赤道直下、雨期真っ盛りで蒸し暑い。ロビーの天井にバタバタ回る扇風機の羽根もけだるく、うっとうしい。

ホテル着。二時間遅れの夕食とて、過酷なパキスタン旅行から比べれば天国。五つ星「ハイアットリージェンシー」のベッドは、快適な眠りを誘い、すがすがしい朝の目覚めを迎える。

レストランの朝食は、テラスの木陰の席だ。湿り気を帯びた熱風がときおり池の水面を揺らす。テーブルにポーカーのカードを並べてギムレットでも飲めば、サマセット・モームの世界になるなあ、とひとりごちる。庭園に沿ったゴルフコースの芝の緑が鮮やかだ。

食事後、訪ねた「ボロブドゥール寺院遺跡」は、石を積み上げた幾つもの巨大なストーパを仏教にまつわる物語の彫刻が取り囲む。千年もの間、火山灰に埋もれて発見されなかったという遺跡に思いを巡らせていると、大声で話す中国人の集団に追い立てられる。

次の世界遺産、「プランバナン寺院遺跡群」へとバスは渋滞の舗装道路を進んでゆく。活気に満ちた町、行き交う車の群れ、急ぐ人、人…経済大国へまっしぐらに進んでゆくインドネシアを肌で感じる。昨年イスラマバードのスラムで日がな一日、道路に座って過ごす男たちと比べてしまうからかもしれない。アフガニスタンからの難民だろうか、虚ろな目を思い出すと、貧富の格差に満ち、紛争の絶えぬ世界に怒りを覚える。

ここは観光地、社会批判はやめてプルメリアの甘い香りに身を委ねよう。バリ島に移動して過ごす三日目。広大な庭園の中にこれまた大きなホテルが点在するヌサドワ地区は、まさにトロピカル・リゾートの要といったところか。

前列左、ゴーグル着用が筆者

朝、バロンダンスを鑑賞。念願の十数名の編成による、本場ガムランの迫力ある演奏は感動モノだった。

四日目は終日フリータイム。エステ、クルージング、ダイビング、釣りなどのアクティビティが用意されており、私が選んだのは、トゥラガ・ワジャ川・上級ラフティング！

早朝、ホテルに迎えに来たツアー会社のジープに乗り込む。他のホテルに立ち寄り、七〇代のアメリカ人の男性、中国人の若い女性二人が同乗。車は山道のカーブをぐいぐい登って行く。

二時間後、上流の出発地に到着。既に集合している中国人、オーストラリア人、フランス人…。一人も日本人はいない。英語のレクチャーを聞き、申込書にサイン。「どれくらい泳げるか？」に一キロ、と答えれば、「ユウアーグレイトフイッシュ！」と下手なお世辞が返ってきた。水着にライフジャケットを装着。着替等所持品はワゴン車が下流の終点地へと運んでくれる。

いよいよボートに四人で乗る。流れはかなり急だ。「フォワード！」後ろの現地リーダーの掛け声に一斉にバドルを漕ぐ。「バック」は逆。「レフトバック」「ライトバック」「ホールドオン」「ヘッドダウン」等指示が飛ぶので休む暇はない。

他の艇に追いつくと、バドルで水をかけあって挨拶するのが楽しい。途中、落ちてくる滝の水を浴びる。「イッツシャワータイム！」なかなかユーモアのあるリーダーだ。

最大の難所はスリル満点、四メートルの滝下りだ。必死のバドルさばきで乗り越せば、リーダーが「グッドチームワーク！」と士気を高めてくれる。猿や熱帯の鳥たちが飛び交うジャングル、たわわに実ったバナナの木を横目に二時間半のラフティングを終え、もはや友人となった四人で東屋のランチ。デリシャス！

スコールが椰子の葉を打って過ぎて行くと、再び暑い日差しがトゥラガ・ワジャ川の水面にきらめいていた。

第五十九号、秋号は平成二十四年九月十二日(水)発刊予定です

ボブの独り言

遅い春とともに現れた可愛い仲間

ボブの独り言

今年は本当に春の訪れが遅かったために「雪が融けたら…」なんて思っていたことがみんな一度に重なってしまい…、特に雑草だけは雪の下でも元気がよくて、ほかの草花の芽が出る前に雑草が元気にあちこちでニョキニョキでした。

私にとっては緑のジュータンで気持ちよかったのですが…、五月の連休が終わってすぐに、あの甘えん坊のノンがお母さんになりました。それもバーバの誕生日に一匹の牡犬を出産したのです。バーバにとっては何よりの誕生プレゼントだったことでしょう。それから待つこと四十時間後に雌犬を出産しました。犬のお産は軽いと言われているのに、こんなに時間が空くのは本当に珍しいことだそうです。

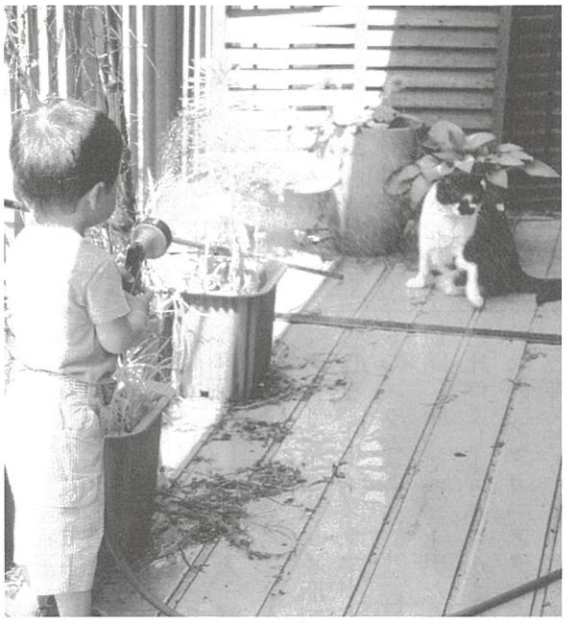
一匹目が産まれた後、何度も何度も庭に出て大きな木の根がすっぽりと入るくらいの穴を掘り続けていました。どんなにか苦しかったのでしょうか？

真人君にとっては突然目の前に現れた子犬達にビックリしながらも、勝手に動く面白いオモチャに大喜びで、大人の目を盗んでは子犬のところに行って大の字に寝て、両腕に一匹づつ乗せては楽しんでいるのです。久美さんは「真人は？　また犬のところだわ…、つぶれるから…」と、止めるのに大変でした。

それと同時に、ますますノンが私に対する警戒心が強くなり、今までにも増して下の部屋には入れなくなってしまいました。母は強しですね！　最近は子犬も歯が痒いらしくズボン（特に真人君の）にぶらさがって噛んだり、あちこちで噛みつくので逃げ回っています。この季刊紙が届くころには、新しい家族の下で可愛がってもらっていることと思います。

そうそう、皆さんにお知らせがあるのです。お墓参りの際に水を汲む場所が変わりました。雪と強風で桶置きが壊れたので、修理していただくついでに場所も今までの後ろの花などを捨てる横に持って来ました。今度は階段がないので安心です。

私は案外その周辺でうろうろしています。この前も久しぶりに私を見たという人が来られて、「ボブちゃん随分太ったわねー、赤ちゃんがいるみたいね！」と言っている声が後ろから聞こえショックでした。ニャ～ン！



お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

編集雑感

「いらっしゃいませ、こんにちは」「千円から入ります」。皆さんもコンビニやファミレスで聞いたことがある言葉だと思います。私はこの言葉に少し違和感を持っています。これらはすべて会社の接客マニュアルだそうです。接客対応の方法を入社時に教育させられるそうです。

去年北海道で列車がトンネル内で故障して止まった事件がありました。乗務員はマニュアル通り司令所へ連絡、指示を仰ぎ、故障箇所の点検中、そのうち煙が充満、乗客はかってに車外へ脱出しトンネルの外へ逃げました。しかし、司令所の指示は車内待機のままだったそうです。そうこうしているうちに火災が発生、幸いにも死傷者がなかったそうですが、乗務員は臨機応変に行動できなかったということです。

学校の教育でも今は規格にあてはめる教育を重要視して発想の自由さを軽んじている傾向のようです。優秀な学者ほど小学生の時は先生の答えにはならないようなユニークな発想をしていた事が多かったと聞いています。自分の目で見て聞いて、自分の頭で判断する。これが大切なのです。そのためには会話が重要です。

昔の商店街で魚屋さん、八百屋さんでの買い物を思い出してください。元気な声で品定めや値引きの会話をしていたではないですか。今はコンビニではマニュアル化された言葉で店員が話し、お客は無言で品物をもらうのがほとんどです。会話する事によって頭の回転を良くして柔軟な発想を出してくれるのです。

でも私は、先日も駅内商店街の肉屋さんで買い物をすると最後に若い女性店員さんに「ほかにご注文は」と聞かれ、ついコロッケも買ってしまうのです。これもマニュアル化の功罪でしょうか。暑さに負けず、節電もして、夏を乗り切りましょう。

（室賀清輝）